

口頭発表

「東京都立動物園でのモルモット介在プログラムの今とこれから」

高松 美香子

1 都立動物園でのモルモット介在プログラムのこれまでと今

上野動物園、多摩動物公園、井の頭自然文化園の都立動物園 3 園では、長年、モルモット介在プログラムを行ってきました。それぞれの園ごとにプログラムの内容は異なるものの、モルモットとの直接的なふれあい―膝の上にのせて、生きている動物の温かさをじかに感じてもらう体験―を重視してきました。ところが新型コロナウイルス感染症拡大により、2020 年 2 月からすべてのふれあいプログラムは一旦中止を余儀なくされたのです。また同時期に国内の動物園では、世界的な動きを受けて動物

福祉の向上が一層重要な課題となっていました。世界動物園水族館協会が打ち出した「動物福祉戦略」を受け、日本動物園水族館協会（JAZA）は、2023 年から順次、加盟園館の動物福祉審査を開始することを明言しました。

国内の動物園は次々と、ふれあいプログラムの見直しを始め、動物福祉の観点からモルモットを膝にのせない・直接さわらないという選択をする園も出てきました。都立動物園としても、ふれあいプログラムを再開するにあたり、感染症対策も鑑みて、大幅な見直しを迫られ、新たな教育プログラムを検討することになりました。



図 1 各園のモルモット介在プログラム実施場所

私たちは、動物園でモルモットを教育プログラムに活用することには、さまざまなメリットがあると考えています。野生動物の展示とは異なり、家畜であるモルモットをごく間近で観察したり直接さわったりすることは、低年齢層の子どもたちにとって心に強く残る体験となり、生きものに関心を向ける初めの一步になるでしょう。そのような体験は、将来的に子どもたちが野生動物や地球環境を守るために行動したいと思う気持ちの土台になると考えています。

私たちはこれからも、動物園で直接モルモットにふれる体験を提供していきたいと考え、それぞれの園で新たなプログラムを検討しました。まず大前提として動物福祉に配慮したうえで、教育効果のあるプログラムを作っ

ていかなくてはなりません。そこで、プログラムごとに企画書を作成し、プログラムの目的やねらいを明確化することにしました。また実際にプログラムを実施したら、私たちの伝えたいことが子どもたちにきちんと伝わっているのかを評価検証して、内容を改善していく必要もあります。このようなプロセスを経て、各園は園ごとの特性に合わせてそれぞれ独自のプログラムを再開しました。

ここでは 1 例として、多摩動物公園のプログラムを紹介します。モルモット博士という設定のパペットと進行役のスタッフとの掛け合いで、紙芝居を用いたりモルモットを観察したりしながら、参加者にクイズを出していきます。モルモットのおくびょうな性質やなで方のポイントについても楽しく伝えること

で、その後のふれあいの際に、モルモットを大切に扱ってもらえるように促します。モルモットを膝にのせてさわっている間は、子どもたちにじっくりとモルモットに向き合って欲しいので、あえてスタッフからの声掛けはし

ないという方針です。モルモットと直に接することで、生きものを大切に思う気持ちを育み、生きものへの興味の扉を開くきっかけの場とすることを目的としているプログラムです。



図 2 多摩動物公園のプログラム「おしえて！モルモット博士！」

2 より良い モルモット介在プログラムのために

モルモットにも参加者にもより良いプログラムを継続して行っていくよう、さまざまな角度から行っている取り組みをお話します。

ひとつ目は、モルモットがふれあいプログラムで受けるストレスを評価することです。モルモットのストレスを評価する手法として、唾液中のコルチゾール濃度を調べる方法がよく用いられていますが、唾液の採取自体がモルモットの負担になってしまう可能性が

あります。そこで現在、北里大学と共同で、モルモットに負担をかけずにストレスを評価する手法の確立をめざしています。モルモットの眼球温度をサーモグラフカメラで撮影して、その温度変化を調べることでストレスの度合いをはかろうと考え、調査を行い、現在、分析を行っているところです。この方法がうまくいけば、動物に負担をかけずに手軽に担当飼育係がモルモットのストレスをチェックできるようになるのではないかと期待しています。



図 3 モルモットのストレスを評価する

動物福祉に配慮したモルモットの飼育管理も徹底させました。こちらは以前から行っていたことですが、よりきめ細やかに対応をしています。例えば、同じ個体ばかりがふれられることを避けるために、使用した個体の記録を取ったり、プログラム中の行動観察を行って、ふれあいに向かない個体は使用しないようにしたりしています。定期的なボディチェックで体に異常が無いか調べたり、定期的な爪切り・シャンプーで病気の予防に努めたりもしています。また、足腰が弱くなってきた高齢個体はプログラムから引退させて、バ

ックヤードでのんびりと余生を過ごしてもらっています。

プログラムの学びの評価も進めています。通常プログラム参加者へのアンケート調査に加え、モニターを募集して、プログラム中の参加者の様子を撮影、スタッフが発話や行動を調査しました。これらを元に、モルモットを介したプログラムが子どもたちへ何らかのプラスの影響を与えることができているかを検証し、ただ可愛いだけではない学びを提供できるプログラム作りを進めていこうとしています。



図 4 プログラムの学びを評価する

障がい児団体向けのプログラムの改善も行っています。これまでは、自分たちの経験を元に工夫しながら対応していましたが、2023年度からソーシャルインクルージョンの専門家に実際にプログラムを見てもらい、スタッフの声かけやプログラムの進め方など、障がいに合わせた対応方法のアドバイスを受け、内容に改善を加えています。

このように、現在はより良いプログラムを作るための取り組みの真ただ中で、すぐに結果が出るものではありませんが、今後の都立動物園のモルモット介在プログラムにぜひ注目して頂ければ幸いです。

3 学校でモルモットを飼育してもらうために

動物園のふれあい動物として最適なモルモットですが、学校飼育動物としても同様に、もっとも適している動物だと私たちは考えて

います。ちょうどよい体のサイズ、飛び跳ねない、寿命が長過ぎないなど、子どもたちが扱いやすい動物としての長所を兼ね備えているからです。そこで都立動物園では、学校でモルモットの飼育を推進してもらうためのさまざまなサポートを行っています。

一つ目が「学校でのモルモットの飼い方」冊子の配布です。現在、さまざまな理由で学校での動物飼育は減少傾向と聞きます。なかでも先生方の多忙は大きな要因かと思いますが、この冊子では、先生にも児童にもなるべく負担を掛けずに、学校でモルモットを健康的に飼育する方法をお伝えしています。

二つ目が、毎年夏に開催している小学校教員対象セミナーの実施です。先生方に授業で活かしてもらえるようなさまざまな講座を開いています。そのひとつ「はじめての生き物飼育」講座では、2023年は水の生き物をテーマに、ヤゴ・メダカなどの飼い方をお伝えま



図 5 「学校でのモルモットの飼い方」冊子の配布



図 6 小学校教員対象セミナーの開催

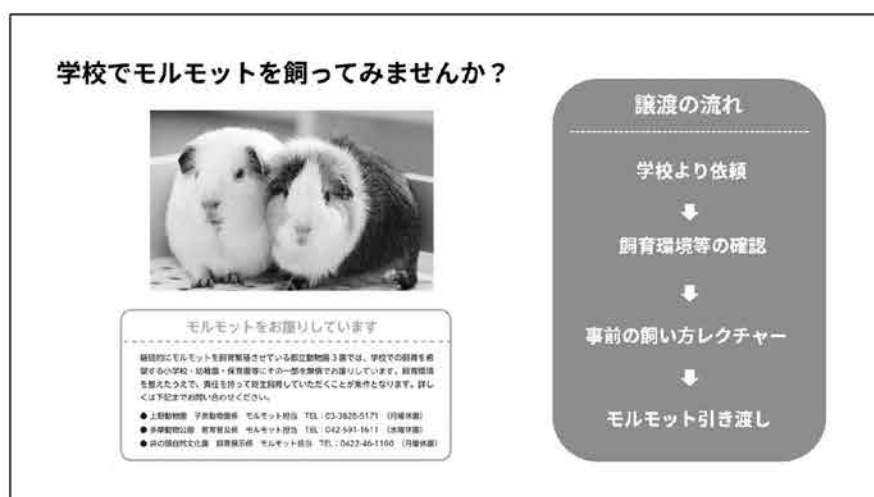


図 7 学校向けにモルモットを無償譲渡しています

した。コロナ禍でお休みしていますが、モルモットの飼い方講座も行っています。講座では、まずは先生自身に本物のモルモットに親しんでもらってから、学校で飼う際の方法やモルモットの扱い方などを飼育係がレクチャーしています。

三つ目のサポートは、モルモットの譲渡です。動物園では継続的にモルモットを繁殖させていますが、その一部を学校団体に無償でお譲りしています。動物園で繁殖した健康なモルモットを飼い方レクチャー付きでお渡しできますので、ぜひご活用ください。

最後に、私たちの思いをお伝えしたいと思います。私たち動物園がモルモットを介したプログラムや学校サポートを行っていくうえで考えていることは大きく2つあります。

ひとつは、モルモットをとおして、生きものの好きの子どもを増やしたいということです。さまざまな事情により家庭で動物とふれあう機会がない子ども、学校がその窓口になり得ると考えています。例えば学校の遠足で動物園のモルモットプログラムを活用して貰

ったり、欲をいえば、学校でモルモット飼育にチャレンジして貰えたりしたら、それほど素晴らしいことはありません。私たちもできる限り協力しますのでぜひ動物園を頼ってください。

もう一つ、動物園としては、家畜であるモルモットをきっかけに、野生動物にも目を向けて貰いたいとも考えています。モルモットを好きになった子どもが、野生動物にも興味を持って動物園に足を運んでもらい、ゆくゆくは野生動物や自然環境を守るために行動できる人になってもらいたいという思いがあります。

私たちはこれからも、生きものの命の素晴らしさを子どもたちに伝えていきたいと考えています。学校飼育動物研究会に関わる皆さまもその気持ちは同じなのではないかと思えますので、ぜひ一緒に協力していけたら嬉しいです。

(公益財団法人 東京動物園協会 教育普及センター)